

かささぎ 通信 第154号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

2025年12月12日発行

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2025年11月の「森三郎の作品を読む会」では、
先回に続き、「城下町」(季刊『新児童文化』復刊1946年8月)を読みました。連続三回目です。

今回読んだ「城下町」の範囲は、大正の終わりから昭和の初めころの時代設定だと思われます。先回の話に続き岸田のおじいさんが登場します。岸田家と仲違いしてから、宗之助の家のかかりつけ医は隣町の深井先生で、近くのおそば屋さんから電話をかけて往診に来てもらっています。ある時、宗之助が風邪を引いたらしく嘔吐し高熱を出しますが、深井先生の都合が悪く、おばあさんとお母さんが相談して、何年かぶりに岸田先生に往診に来てもらいます。しかし、子どもの往診を介して積年の確執が解けたわけではありません。お母さんの「無人島へ漂流でもしたかのやうな、世界中の人から見放されたかのやうな心細さ」という反応には、むしろ外に向かつて心を開かないかたくなさが感じられます。「作者の三郎に、外からの新しいものを受け入れない気持ちがあると感じる」という感想が出ました。

風邪をこじらせて久しぶりに学校に出た宗之助は教室の窓からお城山を見て、頂上にカルピスの立て看板が立っていることに気が付きます。そして学校がひけてから友だちの誠ちゃんたちと三人でお城山に行つた宗之助は、そこで角兵衛獅子の兄弟に出会います。これは『赤い鳥』1934年3月号掲載の「角兵衛獅子」の話を取り込んだものです。先回の「杉でつばう」に続いて二作目の『赤い鳥』の話です。

ここで出てきた「カルピス」には『赤い鳥』や三郎にもエピソードがあります。

立て看板のカルピスの図柄は「黒い字で「カルピス」と書かれたコップ、ストロー、赤い口を開けて笑つてゐる黒い顔の男の人」です。この図は1923年にカルピスの会社がドイツ商業美術家救済事業として公募したポスター・デザインの三等になつたオットー・デュンケルスビューラー(独)の作品です。『赤い鳥』1924年4月号にもこの図

の広告が載っています。(1990年1月には差別問題から会社が自主的に使用を中止しています。)『赤い鳥』には1923年4月号の岡本一平図案の広告をはじめ、多数の図案のカルピスの広告が載っています。『赤い鳥 鈴木三重吉追悼号』(1936年10月)の「珊瑚への志願」の中で三郎は、三重吉がカルピスを好んでいたこと、「角兵衛獅子」掲載の1934年3月号『赤い鳥』を三重吉からカルピスの三島海雲に贈ったことを書いています。ほかにも尋常高等小学校のころのカルピスの思い出が『ももんが三十周年記念特輯』(1986年12月)に書かれています。名古屋市立図書館に勤めていた兄・銚三を訪ねて帰る時、銚三が名古屋駅でホットカルピスを買つてくれたというのです。

タイトルの「角兵衛獅子」は「赤い布の後ろへたれた獅子頭、そろいの縞の着物に、その上の紺の腹がけ、唐草模様のたつつけ」という姿の子どもたちです。近くの神社か芝居小屋で軽業の獅子舞をしていましたのでしょうか。出会わせた同じ年恰好の二組は口喧嘩になります。「相手は学校へも行つていない角兵衛獅子、こちらはそれより偉い学校の生徒」と内心思巻く誠ちゃん。対して角兵衛獅子の子は「学校へ行つても学問なんか一つもできないで」と、むしろ自分たちの方が一段上の人間と思っています。大人たちの角兵衛獅子に対する見方とは違つて、子どもたちはどちらも相手に引けを取らずに口喧嘩している様子に、妙にホツとしたという感想が複数ありました。つまらない意地をはり合う大人たちに翻弄されない子どもたちの姿が見えるよう気がします。次回はいよいよ最後の章です。

お医者さんの「深井先生」の名前は森家の近くの「浅井医院」から連想でしょうか。すぐ近くのおそば屋さんなど、作者の故郷を思わせる風景にも興味が湧きました。

（次回予定）2026年1月9日（金）午後一時半～三時半
「姉」(『銀河』1947年4月号)を読む